

逆形成動詞はどこまで動詞か

— bergsteigen, seilspringen を例に —

池 内 宣 夫*

【要 旨】 bergsteigen, seilspringen などの「名詞+動詞」よりなる複合動詞は同形の名詞化不定詞より「逆形成」されたものである。これらの逆形成動詞の多くは不定詞のみで用いられ、定形を持たない。この語形変化系列の不完全さは逆形成という由来と関係する。逆形成動詞はそれが由来する名詞化不定詞の特徴である統語的縮約を引き継いでおり、そのために一語書きされなければならないが、結果的に定形用法が回避される。さらに、逆形成動詞の不定詞の用法において不定詞の名詞性と動詞性についての「迷い」が観察できるが、これも名詞化不定詞から動詞への発達が不完全であることを示唆している。

【キーワード】 逆形成 名詞化不定詞 不定詞

はじめに

現代ドイツ語において、radfahren (Rad fahren), bergsteigen, seilspringen などの「名詞+動詞」よりなる複合動詞が存在する。これらの複合動詞は「逆形成 (Rückbildung)」により形成されるものとする説が有力である。これらの複合動詞 (逆形成動詞) についてはしばしば屈折 (語形変化系列 (verbales Paradigma)) が不完全であることが指摘される。すなわち、不定詞 (Infinitiv) としてのみ用いられ、定形 (finite Verbformen) をもたないものが多い。例えば、bergsteigen, seilspringen は定形での用法において高い制約がある (?ich steige berg/ ?ich bergsteige; ?ich springe seil/ ?ich seilspringe)。

bergsteigen, seilspringen のような逆形成による複合動詞の形成は極めて生産的な造語法でありながら、このような語形変化系列の不完全さがあることは、言語の機能面からみて重大な損失とも言える。

本稿では、逆形成という由来と語形変化系列の不完全さの間に関連があるのかどうかについて考察を試みる。

1 逆形成動詞の由来と特徴

平成 29 年 5 月 31 日受理

*いけうち・のぶお 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ語学)

1.1 逆形成とは

Fleischer/Barz (1992:51) は逆形成を次のように定義づける。

„Rückbildung“ ist Derivation nicht durch Hinzufügung, sondern durch Tilgung oder Austausch eines Wortbildungssuffixes mit gleichzeitiger Transposition in eine andere Wortart, wobei der Eindruck entsteht, das „rückgebildete“ Wort sei die – kürzere – Ausgangsform.

ここで特に逆形成の本質的特徴と言えるのは、後段の「逆形成された語があたかも元の形 (Ausgangsform) であるかの印象を与える」の部分である。Fleischer/Barz はその例として *Sanftmut* を挙げている。この語は形容詞 *sanftmütig* から形成されたものである。しかしながら、あたかも先に名詞 *Sanftmut* があり、それから形容詞の *sanftmütig* が形成されたという印象を与える。すなわち、*Sanftmut* は通常の「名詞→形容詞」という派生に対して「逆方向」に形成されたものである。

Fleischer/Barz (1992:352) は次のような動詞の逆形成の型を挙げている。

- (1) a. -ung, -er 名詞から接尾辞の削除による品詞転換：

Zwangsräumung → *zwangsräumen*, *Kurpfuscher* → *kurpfuschen*

- b. 名詞を第一構成素、名詞化不定詞あるいは間接的な派生語 (implizites Derivat) を第二構成素とする複合名詞からの品詞転換：

Kopfrechnen → *kopfrechnen*, *Ehebruch* → *ehebrechen*

- c. 形容詞または名詞を第一構成素とする複合的な過去分詞からの不定詞の派生：

ferngelenkt → *fernlenken*, *schutzgeimpft* → *schutzimpfen*

本稿では (1.b) のうち前者のタイプを中心に考察する。このタイプについてはさらに補足が必要である。このタイプでは、「名詞+動詞」という構造をもつ複合名詞から動詞が形成されるが、この複合名詞自身は動詞句 (不定詞句) から形成されるものである。つまり、*Kopfrechnen* は *Kopf* と *Rechnen* の複合形ではなく、動詞句 *im Kopf rechnen* の名詞化不定詞 (substantivierter Infinitiv) である。さらに例を挙げれば、*bergsteigen* が *Bergsteigen* から、*seilspringen* が *Seilspringen* から形成されるとして、*Bergsteigen*, *Seilspringen* そのものはそれぞれ *auf den Berg steigen*, *mit dem Seil springen* から形成されたものである。つまりここでは、一旦不定詞句を名詞化して複合名詞を作っておきながら、その名詞化不定詞から動詞を形成しており、形成方向の逆転が起こっている。¹⁾ つまり、次のようなプロセスを経ている。

- (2) 動詞句 -(名詞化)→ 複合名詞 -(動詞化)→ 複合動詞
auf den Berg steigen *Bergsteigen* *bergsteigen*

1.2 統語的縮約について

逆形成動詞が由来する名詞化不定詞の特徴の一つが「統語的縮約 (syntaktische Reduktion)」である。統語的縮約とは、動詞句 (不定詞句) の統語的關係 (動詞に対する主語、目的語や副詞規定という関係) が名詞化不定詞においては縮約される²⁾ことを言う。例えば、**Bergsteigen** では (2) の通り **auf den Berg steigen** における動詞と副詞規定という統語的關係が縮約されている。**seilspringen** でも同じく **mit dem Seil springen** における動詞と副詞規定という統語的關係が縮約されている。

逆形成動詞はこの名詞化不定詞の特徴である統語的縮約を引き継いでいる。別の例を挙げよう。**seiltanzen** では **Seil** と **tanzen** の関係は任意でありうるのではなく、それが由来する名詞化不定詞 **Seiltanzen** において縮約された関係に固定されている。つまり、逆形成動詞はそれが由来する名詞化不定詞を「参照させる」ことにより機能すると言える。

ここで **radfahren (Rad fahren)** について見ておかなければならない。**radfahren** は動詞句 **mit (または auf) dem Rad fahren** の名詞化不定詞 **Radfahren**³⁾ から逆形成で形成されるとする説が有力である。⁴⁾ しかし、**bergsteigen**, **seilspringen** などが一語書きされるのに対し、**Rad fahren** と分かち書きされる。現行の正書法では、第一構成素が自立的な名詞の性質をほぼ失っているとみなされる場合は一語書きされる。⁵⁾これに従えば、**radfahren (Rad fahren)** においては名詞の自立性が **bergsteigen**, **seilspringen** などより高いことになるが、果たしてそう言えるであろうか。分かち書きはむしろ、慣用による定着の結果、語群 (Wortgruppe) として再分析された結果であると考えるのが妥当であろう。⁶⁾

2 逆形成動詞の語形変化系列

2.1 どのように不完全なのか

上で、逆形成動詞の特徴として主に不定詞で用いられ、定形をもたないなど語形変化系列が不完全であるとした。不定詞以外にどのような形が可能かに基づいて (3) のように分類できる。

- (3) a. 不定詞のみ
 b. 過去分詞が可能 : **bergsteigen (berggestiegen)**
 (他に : **seilspringen, brustschwimmen, kopfrechnen, bausparen, notlanden ...**)
 c. 過去分詞, 定形が可能 : **radfahren (Rad fahren) (Rad gefahren, ich fahre Rad)**
 (他に : **kopfstehen, eislaufen ...; Auto fahren, Maschine schreiben, Schlange stehen ...**)

上の分類は可能な形の組み合わせに基づいて設定したものにすぎない。実際にはその様相はかなり複雑である。それは、個々の逆形成動詞の語形変化系列は実際の使用においてかなり「揺れ」があり、また時代とともに変化するためである。通時的变化について、**Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache** の1980年版と1999年版、さらに **Duden Online** を比較したところ、1980年版では **seilspringen, seiltanzen, kopfrechnen** などは „[nur] im Inf. gebr.“ と注記されているが、1999年版ではいずれも „im Inf. und Part. gebr.“ と分詞が追加されている (**Duden Online** も)。実際に、逆形成動詞において過去分詞は潜在的に可能である

ようである。辞書に採録されていない任意の逆形成動詞についてインターネット上を検索してみると、(4) のような過去分詞の事例を容易に見つけることができる。

- (4) a. (felsklettern) Vor diesem Winter bin ich am liebsten felsgeklettert.
 b. (skispringen) Da mein Nachbar damals auch skigesprungen ist, ...
 c. (fallschirmspringen) Aus 2500m Höhe bin ich Fallschirmgesprungen⁷⁾.
 d. (eiskunstlaufen) ..., als ich zum ersten Mal ... Eiskunstgelaufen bin.
 e. (drachenfliegen) Es wurde ... natürlich auch viel Drachengeflogen.

このように見てくると、「不定詞」とは「不定形 (infinite Verbformen)」を含むものと理解される。純粹に不定詞のみが可能な逆形成動詞が実際に存在するかどうかは疑わしい。なお、zu 不定詞については、辞書に特段の記述がないため不明であるが、不定詞の一種として過去分詞同様に潜在的に可能であると思われる。

一方、定形の発達は明らかに限定的である。少なくとも過去 40 年弱の期間でみる限り、過去分詞などの発達が定形の発達に繋がっている逆形成動詞を見出すことは困難である。⁸⁾

過去分詞や zu 不定詞が可能な逆形成動詞においてはさらに ge, zu の位置の問題がある。これについては、構成素間に置かれる場合、語頭に置かれる場合、さらにそのいずれでもある(固定していない)場合がある。⁹⁾ このうち、構成素間に置かれる場合が優勢である (bergsteigen → berggestiegen/ bergzusteigen, seilspringen → seilgesprungen/ seilzuspringen)。これは逆形成動詞の複合的性格(「名詞+動詞」よりなる)と関連する。第一構成素にアクセントが置かれることもそのことを支持する。Duden (2009:860) はこれを逆形成動詞における一般的な傾向であるとする。

Bei Rückbildungen besteht nun im Deutschen eine Tendenz, zusammengesetzte Verben in eine Abfolge aus Nebenkern (Verbpartikel) und Verb umzuinterpretieren. Dieser Prozess beginnt oft beim Partizip II (Platzierung des Präfixes ge- zwischen den Bestandteilen der Verbindung statt davor);

これに対して、ge, zu が語頭に置かれることは、本稿の対象とする名詞化不定詞由来の逆形成動詞においてはまれである。¹⁰⁾ 名詞化不定詞由来の逆形成動詞では ge, zu が語頭に置かれる形は構成素間に置かれる形の異形として起こる場合が多い (kopfrechnen → kopfgerechnet, gekopfrechnet (Duden (2009:860))。 ¹¹⁾

2.2 なぜ不完全なのか

前節で、第一構成素の扱いの問題を指摘した。その問題とは、第一構成素の分離可能性(不可能性)についての判断に関するものである。「名詞+動詞」という形をもつ逆形成動詞では、その複合的性格は意識されているものの、第一構成素(名詞)が実際に分離可能であるのかについての判断がまだ定まっていない。言い換えれば、形態的に分離可能(morphologisch trennbar)とは認識されている(それゆえ、過去分詞, zu 不定詞では構成素間に ge, zu が置かれることが多い)ものの、統語的に分離可能(syntaktisch trennbar)かどうかについての判

断がまだ定まっていない（揺れている）。このことが、定形での用法が避けられる、その結果、定形が定まらないという事態を招いていると考えられる。Vikner (2005:98) は、逆形成動詞が全体として分離動詞であるのか非分離動詞であるのかという問題が未解決であること、それにより分離動詞と非分離動詞の両方に課される要求を満たさねばならないために、定動詞の位置（第2位）には用いられないとする。

... the categorical status of the whole complex verb has not been resolved, i.e., it has not been resolved whether it is a V° or a V^* (...) that *schutzimpfen* and the other immobile complex verbs above have to fulfill BOTH the requirements imposed on complex verbs of the V° type AND the requirements imposed on complex verbs of the V^* type.¹²⁾

上で述べてきたことは、第一構成素の分離可能性（不可能性）の判断が回避できる文中での位置においては、定形が未発達の逆形成動詞においても定形用法が例外的に現れることと符合する。それは副文の文末位置においてである（wenn er ... *bergsteigt/ seilspringt/ kopfrechnet* ...）。これは多くの研究者が指摘するところである。¹³⁾

前節において、多くの逆形成動詞では過去分詞や *zu* 不定詞が発達しており、そこでは第一構成素が分離要素として扱われる傾向があると述べた。それに従えば、定形の問題は第一構成素の分離で解決してもおかしくないはずである。しかし実際には、過去分詞や *zu* 不定詞が可能な逆形成動詞においても、定形の用法はいまなおまれのままである。さらに、逆形成動詞において、定形では第一構成素は非分離要素扱いされる傾向があると逆の指摘もある。

Gebrauchsanalysen und Informantenbefragungen belegen insgesamt bei diesen Schwankungsfällen eine zunehmende Tendenz zu untrennbarem Gebrauch der Verben in den finiten Formen sowie zur Vervollständigung der Paradigmen. (Fleischer/Barz 1992:353)

もし実際にそのような傾向があり、他方では、過去分詞、*zu* 不定詞において分離動詞的に扱われる傾向があるならば、それはドイツ語の分離・非分離動詞の原則に対する重大な違反（例外）になる。すなわち、*bergsteigen* → *berggestiegen*, *ich bergsteige* のような言うなれば「分離・非分離両用動詞」¹⁴⁾を生むことになる。

このように、語形変化系列の不完全さは第一構成素の問題だけからでは説明できない。以下では、過去分詞、*zu* 不定詞において第一構成素が分離可能な扱いを受ける場合が多いにもかかわらず、定形の用法が未発達であることについて別の角度から眺めてみたい。

1.2 において、逆形成動詞はそれが由来する名詞化不定詞の特徴である統語的縮約、すなわち対応する動詞句に存在する統語的関係の縮約によって規定されていること、それにより、逆形成動詞は対応する名詞化不定詞を「参照させる」ことによって機能するという見解を述べた。それに従えば、逆形成動詞は縮約された統語的関係を担保するために、名詞化不定詞同様に一語書きされなければならないと考えることができる。同じく 1.2 で、「名詞+動詞」という構造をもつ複合動詞では自立的な名詞の性質が失われている場合は一語書きされるという正書法規

則に言及した。名詞の自立性の問題と統語的縮約との関連は明らかである。つまり, *bergsteigen*, *seilspringen* において *Berg*, *Seil* が自立的な名詞の性質を失っているとすれば, それはまさに統語的縮約の結果であると考えすることは十分根拠のあることである。この正書法規則は不定詞の表記法に関するものであるが, 名詞化不定詞由来の逆形成動詞のうちこの規則により不定詞が一語書きされるものは通常, 定形用法をもたない。このように, 定形用法の制限と逆形成動詞における統語的縮約の間には因果関係を認めることができる。逆形成動詞ではその統語的縮約を保証するために形式的な一体性を維持しようとする力が強く働き, このことが定形での用法が避けられるという結果をもたらしていると考えられる。

3 逆形成動詞の不定詞としての用法

3.1 名詞的用法と動詞的用法

逆形成動詞は主に不定詞で用いられるとしてきたが, その実際の使用例について検討したい。なお, ここでは「単純不定詞 (*reiner Infinitiv*)」の名詞的用法と動詞的用法に限定する。

不定詞の名詞的用法とは文中で名詞の位置を占める場合であり, 主語, 述語内容語, 特定の動詞においては目的語の位置¹⁵⁾に現れる。

- (5) a. ... ist bergsteigen gefährlich. (主語)
- b. Sein Hobby ist bergsteigen. (述語内容語)
- c. Er lernt bergsteigen. (目的語)
- d. Allein bergsteigen ist gefährlich. (文相当の主語)

しかしながら, (5.a), (5.b), (5.c) においては, 名詞化不定詞を用いることが圧倒的に多い (例えば (5.a) は ... ist (das) Bergsteigen gefährlich.)。逆形成動詞は名詞化不定詞から品詞転換により形成されたものであり, その不定詞を名詞の位置で用いる積極的な理由はほとんどない。他方, 主語, 述語内容語の位置で副詞規定等を伴う場合 (5.d) は不定詞が用いられる (動詞的不定詞¹⁶⁾)。ただし, インターネット検索の結果では, 動詞的不定詞が用いられる位置においても名詞化不定詞と見受けられる大文字書きの事例が散見された。

- (6) a. Und so richtig Bergsteigen ist das natürlich auch nicht mehr ...
- b. Eine weitere Übung, welche die Katapultfähigkeit der Faszien trainiert ist barfuß Seilspringen oder Treppenlaufen ...

不定詞の動詞的用法とは上位の動詞と結ばれ一つの述語 (*Prädikat*) を形成する場合である。一例として助動詞と共に用いられている事例を *bergsteigen*, *seilspringen* についてインターネット上で検索した結果を以下に示す。

- (7) a. Wollen Sie wandern, bergsteigen, radfahren, Städte bereisen, ...?
- a' ..., ob Sie Bergsteigen oder die Kultur studieren wollen ...
- b. Denn in dieser Gegend können Sie bergsteigen, segeln und tauchen, ...

- b' Sie ... konnten nicht mehr schlafen, konnten nicht mehr Bergsteigen ...
- c. Vor hundert Jahren mussten die Kartografen noch bergsteigen, um das Gebirge zu vermessen.
- c' Allerdings, ein bisschen Bergsteigen mussten wir dann doch.
- (8) a. wollen wir seilspringen?
- a' Wollte gerade ne Runde Seilspringen, ...
- b. Bei „Die unendliche Geschichte“ von Michael Ende konnte ich nicht vernünftig seilspringen,
- b' Als Kind konnte ich richtig gut Seilspringen.
- c. Damals, in den Rocky-Filmen, musste Sylvester Stallone seilspringen, treppensteigen und auf Sandsäcke klopfen ...
- c' ... wie lang muss ich Seilspringen um einen vergleichbaren Trainingseffekt wie bei Joggen zu erzielen?

ここで特筆すべきは語頭の大文字書きがかなり見られることである ((7), (8) の a', b', c')。大文字書きを当該助動詞の本動詞的用法と関連づけることも可能である (例えば (7.b'), (8.b'))。その場合は名詞化不定詞として解釈できる。

3.2 不定詞の名詞性と動詞性

動詞的用法において多く見られる大文字書きは何を示唆しているのでしょうか。(7), (8) の助動詞文の事例において, **Bergsteigen**, **Seilspringen** が動詞として用いられているとすれば, 大文字書きは正書法規則の無知によるものか, さもなくばそれらの形がそもそも名詞であるのか, 動詞であるのかについての迷い (**Unsicherheit**) が作用している可能性がある。

動詞として認識されていることについては, 過去分詞や **zu** 不定詞においても大文字書きの事例が確認されることから支持される。

- (9) a. Heute wird wiederum Berggestiegen — diesmal von der anderen Talseite aus.
- b. Gestern bin ich 40min Seilgesprungen, bisschen gelaufen ...
- (10) a. Ich habe eigentlich probiert ..., zur Annapurna zu gehen und einfach Bergzusteigen.
- b. Er ... hatte an diesem Abend nicht nur die Möglichkeit, das erste Mal in seinem Leben Seilzuspringen und zu boxen

不定詞の名詞性・動詞性は不定詞の本質と関連する。不定詞の起源は動詞的名詞である。つまり, 動詞を名詞として用いる場合に用いられたのが不定詞という形である。それゆえ, 不定詞は常に名詞的性質を備えている。上でみた不定詞の名詞的用法(名詞的不定詞)がまさにそうであるし, 助動詞構文についても助動詞が取ったのは目的語として用いられた名詞的形態である不定詞であった。¹⁷⁾ 助動詞の本動詞的用法と解釈される例 (7.b'), (8.b') がその名残りとも言える。現代ドイツ語において, 不定詞の名詞性はいくつかの構文においてなお顕著に認められる。筆者は池内 (2013) で, <sein+不定詞> よりなる「不在構文 (Absentiv)」においては,

動詞的な不定詞と名詞的な不定詞が交替することを指摘した。不定詞部に名詞的不定詞が用いられている〈sein+不定詞〉の例を、類似する〈gehen+不定詞〉構文の例と併せて挙げる。

- (11) a. ... und wir waren dort Bergsteigen.
 b. Ich war Seilspringen und habe Fußball gespielt ...
- (12) a. Meine Eltern sind mit uns oft Bergsteigen gegangen.
 b. ... geht sie am liebsten Seilspringen mit ihren Freundinnen, vorne im Hof.

逆形成動詞の不定詞の動詞的用法において多く観察される大文字書きが不定詞の名詞性と動詞性に関する迷いの現れであるとすれば、それは名詞化不定詞から動詞への発達が不完全であることを示唆するものと言える。

おわりに（結論にかえて）

本稿では、逆形成動詞の語形変化系列が不完全であることをその由来と関連づけて論じた。

逆形成動詞はそれが由来する名詞化不定詞の特徴である統語的縮約によって規定されており、対応する名詞化不定詞を「参照させる」ことによって機能する。逆形成動詞ではこの由来に起因する制約により一体性を維持する力が強く働き、その結果が定形用法の回避に現れると考えられる。また、逆形成動詞の不定詞としての用法を検証すると、大文字書きなどから不定詞の名詞性・動詞性に関する迷いが認められる。このことは、逆形成動詞のそれが由来する名詞化不定詞への「近さ」を示唆している。

これらのことはすべて、逆形成動詞は動詞としての発達が不完全であると考えられる根拠となりうる。不定詞が名詞起源であることを考えると、不定詞でのみしか用いられない動詞はまだ動詞にはなりきっていない。¹⁸⁾

注

- 1) 逆形成の定義は研究者によって微妙に異なる。例えば Eisenberg (1998) は -er, -ung をもつ動詞派生名詞を含む複合名詞から動詞が形成される場合 (Fleischer/Barz の (1.a) のタイプ) を逆形成とみなし、それ以外の複合名詞からの動詞の形成は「転換 (Konversion)」とする。本稿では、逆形成を (2) に示すような由来をもつ複合名詞からの形成と理解する。なお、逆形成動詞は動詞句から直接的ではなく、複合名詞から間接的に形成されるため、「疑似複合語 (Pseudo-Komposita)」と呼ばれることもある。
- 2) Brinkmann (1981 : 191) を参照。
- 3) Brinkmann (1981 : 191) は Radfahrer からの逆形成と考える。
- 4) Rad fahren などは「抱合 (Inkorporation)」と分析されることがある。抱合とは、動詞の構成要素が動詞と結合する (動詞の形態的構成素となる) 現象を指す。しかし、抱合は「造語タイプ」というよりも「造語手段」である。逆形成が通時的に由来を問題にするのに対し、抱合などは共時的な形態分析であると言える (Gallmann (1999:288) 参照)。
- 5) *Deutsche Rechtschreibung. Regeln und Wörterverzeichnis.*(2006), Regel 34(3).
- 6) 正書法のルールは逆形成などの造語法を必ずしも反映しているわけではないことに注意すべき

- である。このことと関連して、「類形成 (Analogiebildung)」という現象を指摘しておく。これは、既成の語形に倣って一連の語が形成される場合である。例えば Zug fahren, Achterbahn fahren, Karussell fahren などは Rad fahren, Auto fahren からの類形成とも考えられる。
- 7) 語頭の大きい文字書きについては 3 章で問題化する。
 - 8) もちろん常に揺れは観察される。例えば brustschwimmen, rüdenschwimmen などでは定形用法も確認される (ich schwimme Brust)。上記の辞書においても「不定詞のみ」に meist と限定がついている。Eisenberg (1981:83) も参照。
 - 9) ge と zu が同様の振り舞いをみせるかについて、Duden (2009:707) は zu の位置は ge よりも可変的であるとする (sonnenbaden → sonnengebadet; sonnenzubaden/ zu sonnenbaden)。
 - 10) 名詞化不定詞由来の逆形成動詞の例としては staubsaugen → gestaubsaugt, zu staubsaugen がある。Eisenberg (1981:81) は brandmarken → gebrandmarkt, zu brandmarken, maßregeln → gemäßregelt, zu maßregeln などを挙げるが、これらは名詞化不定詞からの逆形成とは言えない。
 - 11) Vikner (2005:100) も ge, zu が構成素間に置かれる形 (infixation) は、これらの要素が語頭に置かれる形 (prefixation) が優勢な複合動詞においても、もう一つのオプションとして存在するとする。なお、形成法が異なる二つの語形がある場合、構成素間・語頭の両形が並存することがある (例: 語群: Staub saugen → ich sauge Staub, Staub gesaugt, Staub zu saugen / 逆形成動詞: staubsaugen → ich staubsauge, gestaubsaugt, zu staubsaugen)。これについては、Duden (2009:860), Eisenberg (1981:84) を参照。
 - 12) V^oは非分離動詞、V*は分離動詞を表す。
 - 13) 例えば Brinkmann (1981), Eisenberg (1981,1998), Freywald/Simon (2007), Vikner (2005) など。
 - 14) これには実際に先例もある: notlanden → notgelandet, notlandete。
 - 15) その代表は üben, beibringen など。
 - 16) 不定詞の名詞的用法における名詞的不定詞と動詞的不定詞については Duden (2005:798, 849) を参照。
 - 17) 福元・島崎 (2012: 7) を参照。
 - 18) 同様の見解は Eisenberg (1998:322) にもある。

参考文献

- Brinkmann, Henning (1981): Die Zusammensetzung im Deutschen. In: Lipka, L./ Günther, H. (Hg.): *Wortbildung*. 187-199, Darmstadt.
- Deutsche Rechtschreibung. Regeln und Wörterverzeichnis. Entsprechend den Empfehlungen des Rats für deutsche Rechtschreibung. Überarbeitete Fassung des amtlichen Regelwerks 2004 mit Nachträgen aus dem Bericht 2010.* München/Mannheim, 2006.
<https://www.korrekturen.de/regelwerk/>
- Duden Bd. 4 *Die Grammatik*. (2009) Mannheim/Wien/Zürich.
- Eisenberg, Peter (1981): Substantiv oder Eigennamen? Über die Prinzipien unserer Regeln zur Groß- und Kleinschreibung. In: *Linguistische Berichte* 72, 77-101.
- Eisenberg, Peter (1998): *Grundriß der deutschen Grammatik. Bd. 1: Das Wort*. Stuttgart/Weimar, Metzler.
- Fleischer, Wolfgang/ Barz, Irmhild (1992): *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen, Niemeyer.
- Freywald, Ulrike/ Simon, Horst J. (2007): Wenn die Wortbildung die Syntax stört: Über Verben,

- die nicht in V2 stehen können. In: Kauffer, M./ Métrich, R. (Hg.): *Verbale Wortbildung im Spannungsfeld zwischen Wortsemantik, Syntax und Rechtschreibung*. 181-194, Tübingen.
- Gallmann, Peter (1999): Wortbegriff und Nomen-Verb-Verbindungen. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 18, 2, 269-304.
- Vikner, Sten (2005): Immobile complex verbs in Germanic. In: *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 8, 83-115, Kluwer Academic Publishers.
- 池内宣夫 (2013) 「現代ドイツ語の Absentiv (不在構文) の形と意味について—不定詞句構造を中心—」 日本独文学会西日本支部編『西日本ドイツ文学』第 25 号 1-15.
- 福元圭太・島崎啓 (2012) 『ドイツ語 不定詞・分詞』大学書林.

Wie verbal sind rückgebildete Verben?

— Dargestellt am Beispiel von *bergsteigen* und *seilspringen* —

IKEUCHI, Nobuo

Abstract

Verben wie *bergsteigen* und *seilspringen* werden aus den homophonen substantivierten Infinitiven (*Bergsteigen*, *Seilspringen*) rückgebildet. Bekanntlich werden rückgebildete Verben meist nur im Infinitiv gebraucht. Zwischen dem unvollständigen verbalen Paradigma und der Wortbildungsart „Rückbildung“ besteht ein Zusammenhang. Bei substantivierten Infinitiven werden die syntaktischen Beziehungen in den zugrundeliegenden Verbalphrasen neutralisiert („syntaktische Reduktion“). Dies wirkt sich restringierend auf den Gebrauch rückgebildeter Verben aus. Sie werden immer zusammengeschrieben, um die verdichteten syntaktischen Beziehungen zu bewahren, was auch dazu führt, dass finite Formen vermieden werden. Im infiniten Gebrauch rückgebildeter Verben lässt sich zudem Unsicherheit hinsichtlich nominalen bzw. verbalen Charakters beobachten. All dies lässt darauf schließen, dass bei rückgebildeten Verben die Entwicklung von substantivierten Infinitiven hin zu Verben unvollständig geblieben ist.

【Key words】 Rückbildung, substantivierter Infinitiv, Infinitiv